

◆ 性教育に対する考え方（表 5）

小学校 1 年生-6 年生保護者に「性教育の授業は、大切だと思うか」を尋ねた（表 5）。「大切だと思う」と回答した保護者は、1-6 年の学年順に、84%、84%、82%、86%、86%、87% で、学年にかかわらず約 9 割近い保護者が性教育の重要性を認識していた。

◆ 性教育の貢献度（表 6）

小学校 1 年生-6 年生保護者に「性教育で学んだことは、子どもの現在の生活に役立つと思うか」を尋ねた（表 6）。「現在役立つと思う」と回答した保護者は、1-6 年の学年順に、52%、52%、53%、56%、57%、59% で、学年上昇とともにわずかに増加したが、子どもの現在の生活に役立つと考えていた保護者は 6 割未満にとどまっていた。

表 5. 性教育は大切な学校教育だと思うか

		度数	%
小学 1 年生	はい	584	84.0
	いいえ	19	2.7
	わからない	88	12.7
	不明	4	0.6
	合計	695	100.0
小学 2 年生	はい	607	84.4
	いいえ	29	4.0
	わからない	78	10.8
	不明	5	0.7
	合計	719	100.0
小学 3 年生	はい	638	82.3
	いいえ	30	3.9
	わからない	101	13.0
	不明	6	0.8
	合計	775	100.0
小学 4 年生	はい	685	85.6
	いいえ	27	3.4
	わからない	83	10.4
	不明	5	0.6
	合計	800	100.0
小学 5 年生	はい	790	85.7
	いいえ	21	2.3
	わからない	104	11.3
	不明	7	0.8
	合計	922	100.0
小学 6 年生	はい	727	86.5
	いいえ	15	1.8
	わからない	94	11.2
	不明	4	0.5
	合計	840	100.0

表 6. 性教育で学んだことは子供の現在の生活に役立つと思うか

		度数	%
小学 1 年生	はい	364	52.4
	いいえ	70	10.1
	わからない	258	37.1
	不明	3	0.4
	合計	695	100.0
小学 2 年生	はい	372	51.7
	いいえ	67	9.3
	わからない	270	37.6
	不明	10	1.4
	合計	719	100.0
小学 3 年生	はい	407	52.5
	いいえ	68	8.8
	わからない	295	38.1
	不明	5	0.6
	合計	775	100.0
小学 4 年生	はい	447	55.9
	いいえ	56	7.0
	わからない	291	36.4
	不明	6	0.8
	合計	800	100.0
小学 5 年生	はい	527	57.2
	いいえ	60	6.5
	わからない	329	35.7
	不明	6	0.7
	合計	922	100.0
小学 6 年生	はい	497	59.2
	いいえ	54	6.4
	わからない	284	33.8
	不明	5	0.6
	合計	840	100.0

◆ 性教育の貢献度（表 7）

小学校 1 年生-6 年生保護者に「性教育で学んだことは、子どもの将来の生活に役立つと思うか」を尋ねた（表 7）。「将来役立つと思う」と回答した保護者は、1-6 年の学年順に、73%、73%、72%、73%、73%、75%で、学年にかかわらず全学年で 7 割以上の保護者が性教育が将来役立つと考えていた。

(2) 性に関する教育の内容に関する要望

◆ 小学校の性教育の内容についての要望（全学年）（表 8）

小学校 1 年生-6 年生保護者に性教育で「小学生の間にぜひ教えて欲しい」という強い要望を持つ内容を尋ねた（表 8）。多かった順に「命の大切さ」94%、「相手を思いやる気持ち」93%、「自分を大切にしようとする気持ち」88%、「家族や周囲の人とのかかわり」84%、「男女のからだの違い」61%、「からだの発育や発達」60%、「思春期の不安や悩み」36%、「性器の名称」29%、「エイズや性感染症とその予防」「性犯罪」24%、「性に関する情報への対応」17%、「性交」13%、「妊娠や避妊法」11%の順であった。最も要望が高かったのは、人間関係の基本的な教育に関する内容で、その次が第二次性徴に関する内容で、それらの内容は保護者の半数以上の要望があった。しかしながら保護者の要望が半数を切る項目の中にも、日本の現状を考えると学校での教育の必要性がある内容も多く含まれていることから、特に要望が下位の項目の教育を行う際には、保護者への十分な説明を提供し、理解を得ることが重要であることが示唆された。

表 7. 性教育で学んだことは子供の将来の生活に役立つと思うか

		度数	%
小学 1 年生	はい	506	72.8
	いいえ	22	3.2
	わからない	162	23.3
	不明	5	0.7
	合計	695	100.0
小学 2 年生	はい	526	73.2
	いいえ	22	3.1
	わからない	165	22.9
	不明	6	0.8
	合計	719	100.0
小学 3 年生	はい	556	71.7
	いいえ	32	4.1
	わからない	182	23.5
	不明	5	0.6
	合計	775	100.0
小学 4 年生	はい	587	73.4
	いいえ	25	3.1
	わからない	185	23.1
	不明	3	0.4
	合計	800	100.0
小学 5 年生	はい	675	73.2
	いいえ	30	3.3
	わからない	212	23.0
	不明	5	0.5
	合計	922	100.0
小学 6 年生	はい	631	75.1
	いいえ	26	3.1
	わからない	180	21.4
	不明	3	0.4
	合計	840	100.0

表 8. 「小学生の間に学校でぜひ教えてほしい」と思う内容

	%
命の大切さ	94.4
「相手を思いやる気持ち」	93.3
「自分を大切にしようとする気持ち」	87.9
「家族や周囲の人とのかかわり」	83.8
「男女のからだの違い」	60.5
「からだの発育や発達」	60.4
「思春期の不安や悩み」	35.6
「性器の名称」	29.4
「エイズや性感染症とその予防」	24.0
性犯罪	23.8
性に関する情報への対応	17.3
性交	12.7
妊娠や避妊法	10.9

B 県小学生の保護者に対する意識調査結果のまとめ（2006 年）

B 県教育委員会との共同研究

注：調査結果のうち、性に関する教育に直接関連する項目のみ抜粋

- (1) **性教育の授業参観の経験**：小学校の中学年/高学年では 6 割前後の保護者が性教育に授業参観に参加経験あり。小学生保護者の性教育に対する関心の高さ示す。
- (2) **性教育に対する学校からの情報提供**：中学年/高学年の保護者への情報提供（保健便り等）は約 50%前後。学校から家庭への一層の情報提供の必要性あり。
- (3) **性教育への保護者の要望**：性教育に対する小学生の保護者の要望は、上位は直接的な性教育ではなく人間基礎教育的な内容。「第二性徴」に関する教育の必要性はある程度理解。「エイズ性感染症予防教育」への理解は低い。近年の子どもが置かれている社会の現状への認識を高めるための、保護者向け取り組みの必要性。

2. 実験的研究：中学生に対する HIV 予防介入研究(学校ベース)

◆ 全国の中学生/高校生に対する予防介入研究(学校ベース)

2003 度までに本研究グループで社会疫学的アプローチによって開発された授業モデル (WYSH モデル) は、2004 年度からは厚生労働省の青少年エイズ対策事業となり、2004-2005 年度には全国から募集した中学校、高校を対象に開発された教育モデルの評価が行われた。2006 年度には、同じく厚生労働省の青少年エイズ対策事業として、さらに、本プロジェクトの全国的普及のための対象の拡大・生徒の行動段階別教育内容の改善および効果の確認を目的に研究を拡大継続した。

【実施目的】

WYSH モデルの全国的普及のための対象拡大と効果的な研修会の運営方法の開発、予防教育内容の改善/追加、および教育の効果評価等の検討を目的とする。

【実施者と実施形態】

(実施) 厚生労働省若者等 HIV 社会疫学研究班

厚生労働省青少年エイズ対策事業として、全国の文部科学省性教育実践調査研究指定地域の指定校、及びその他個別の希望校から参加校を募集。

【参加校】

(1) 参加自治体数：26 都道府県 (昨年の 1.7 倍増)

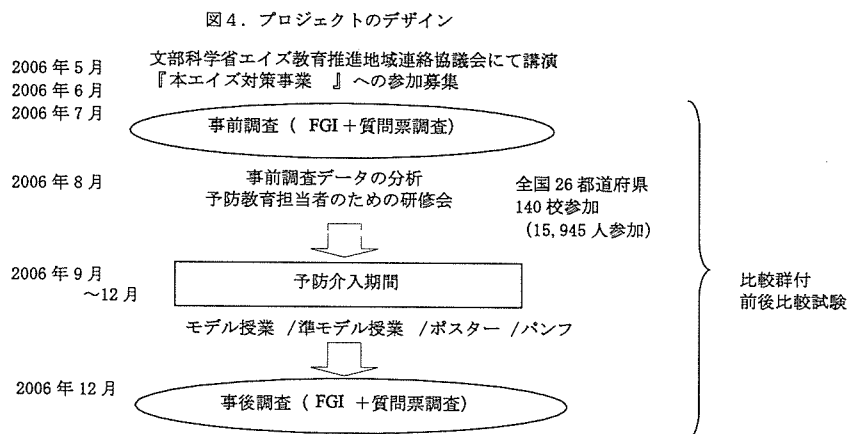
1 北海道、2 山形県、3 岩手県、4 福島県、5 茨城県、6 埼玉県、7 東京都、8 神奈川県、9 石川県、10 富山県、11 岐阜県、12 和歌山県、13 滋賀県、14 京都府、15 大阪府、16 岡山県、17 広島県、18 鳥取県、19 山口県、20 徳島県、21 愛媛県、22 高知県、23 宮崎県、24 佐賀県、25 長崎県、26 鹿児島県

(2) 参加校数：140 校 (中学校 88 校 [昨年の 3 倍増]、高等学校 52 校 [昨年の 2 倍増])

(3) 参加生徒数

- ① 事前調査：15,945 人 (有効回答率 99.3%：回収数 16,030 人 [性別不明 15 名、不完全記入 70 名を除外])
 - ・ 中学生 8,044 人 (男子 4,060 人、女子 3,984 人)
 - ・ 高校生 7,901 人 (男子 3,625 人、女子 4,276 人)
- ② 事後調査：16,290 人 (有効回答率 99.0%：回収数 16,455 人 [性別不明 56 名、不完全記入 109 名除外])
 - ・ 中学生 7,922 人 (男子 3,974 人、女子 3,948 人)
 - ・ 高校生 8,368 人 (男子 3,978 人、女子 4,390 人)

【プロジェクトの流れ】(図 4)



【 研修会の内容 】

目的：参加中学校・高等学校の予防教育担当者が、HIV/STD の流行状況や治療について最新の状況を習得し、かつ WYSH プロジェクトの授業モデルを各校の生徒の発達段階/行動段階等の実態に適した内容に修正し、自立して実施できるように支援すること。（*中学校用と高等学校用は別々に実施）

実施日：2005 年 8 月（3 回）

実施場所：福島、京都、宮崎の 3 箇所で開催

対象：参加校で予防教育を担当する可能性のある教師（クラス担任、養護教諭、保健体育科教諭、家庭科教諭など）を原則としたが、参加県教育委員会の指導主事（指導者研修会を兼ねて）、参加校の管理職、参加校の管轄の保健所保健師、参加県の保健行政担当者。

研修会の特徴：

- ① 参加校は研修会以前に事前調査を終え、その集計結果を研修会のときに配布する（集計は全て研究班で実施）。参加校は自分の学校の調査結果を知った上で、研修を受ける。
- ② WYSH モデルで使用する独自教材（ビデオ、パワーポイント）を無料提供。
- ③ 参加校に研究班のモデルを押し付けるのではなく、自分の学校の調査結果を踏まえて各自修正し、各学校に合わせた授業案を作成する。
（*教材の配布は、調査を実施した参加校のみとし、オブザーバーには配布しない）

研修会の構成：（中学校/高校各一日＝9 時間コース）

●研修会参加までに準備すること：事前送付された①HIV の流行状況に関する最新情報のビデオおよび②HIV の基礎と HIV 診療の最前線に関するビデオを見て、HIV の基礎知識を得た上で研修会に参加することを条件とした。

（*注：昨年度までは、HIV 流行・治療の最前線として研修会の第一部で HIV 基礎講座を実施していたが、今年度からは時間の制約上、事前学習のできるものは事前に済ませて、研修会では、具體的な授業の展開方法の部分に時間がさけるように配慮した。）

●研修会当日の流れ

- ① 全国の中学生・高校生の性意識/性行動の現状の確認
- ② 事前データ還元（自校データと全国平均を比較することにより、自校の現状を把握）
- ③ WYSH 教材（独自ビデオ、パワーポイント）の配布
- ④ 上記教材を用いた平均的モデル授業の実施方法の説明
 - ・ 授業導入用および気分転換用の各種ゲームの紹介
 - ・ パワーポイントの説明のしかた
 - ・ 質問への答え方
 - ・ ビデオ上映のタイミングや補足説明のしかた
 - ・ 課題提供型授業の実施方法（グループワークのすすめ方）
- ⑤ 参加者による各校の授業指導案作成
 - ・ グループで各校の事前データを基に、平均的モデル授業を参考に、各校に適すると思われる授業を企画する。
- ⑥ 各校で実施可能な指導案の発表（授業実施の際の各校の問題点と工夫した点を説明）
 - ・ 指導案についての参加者相互の意見交換および講師からの助言
 - ・ 各校の指導案の修正→指導案の完成

【モデル授業の内容】（中学生用と高校生用は発達段階に応じ内容が異なる）

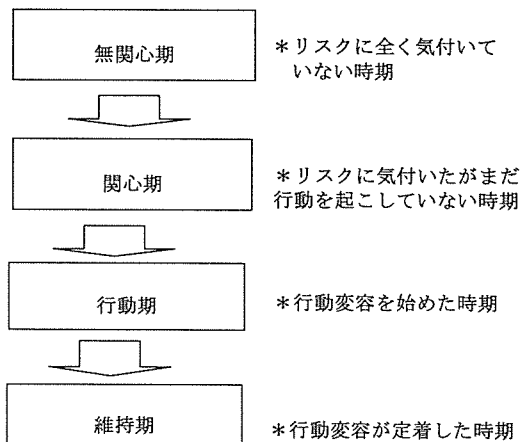
(1) 授業内容/教材開発のコンセプト

① 調査や評価の結果に基づいて開発：昨年度までに教育効果の実証された内容を基礎に、さらに今年度の事前調査の結果を反映させ、各学校の生徒の発達段階、行動段階（図5）に応じた修正を行う。

② リスク認知の向上を図る（リスクを自分のこととして捉えられるようにする：risk personalization）：事前調査の結果より今回のプログラム参加校の生徒は、平均として「無関心期」にあることが示されたため、risk personalizationを重点目標として下記の3点に配慮した。

- i 地域性を強調すること：地元の疫学情報の提供（リスクを身近に感じさせる）
- ii STD/中絶の情報を主に提供すること：エイズよりも身近な情報（望まない妊娠・一般の性感染症など）を提供
- iii 誰にでもリスクがあることを伝えること：現在一人のパートナーであっても性的ネットワークの概念を説明し、知らぬ間に性的ネットワークの中に取り込まれてしまい、STD/HIVに感染する危険のあることを伝える。

図5. 行動段階



(2) 授業におけるメッセージの要点

- ① 性関係を急がないこと（丁寧な時間をかけた人間関係の構築）→（未経験者）初交年齢を遅らせる、（経験者）パートナー数を減らす。現在の交際を今一度振り返ってもらう。
- ② 自分にもリスクがあること（上記①②③の内容から理解を促す）

*注：昨年度の調査結果より、コンドームの実演教育を強調しなくても予防行動（コンドーム使用率の向上）が促進されること明らかとなったため、今年度は、コンドームの必要性は指摘するが、コンドーム実演教育は行わない方針で行なった。

(3) 授業構成：授業は以下の4部構成とした、

① 導入（アイスブレイキング）

ゲーム、クイズによるリラクシング。後続の主要講義部分との関連づけを行い、授業参加へのmotivationを高める。（注：生徒が使用している言葉、および性の規範/意識の確認を行い、授業実施の際の参考にする。）

② パワーポイント（15分間）：WYSHパンフレット内容に沿ったQ&A形式のパワーポイント。大型スクリーンを使ったパワーポイント発表により、地域限定・対象校限定の情報を提供し、さらに中学生や高校生が持っている誤解や質問に答える形式とした。授業の最後にパンフレットを配布し家庭での復習も可能とする。

③ ビデオ上映（10分間）：ビデオ内容は、中学生・高校生ともクラミジアを治療しないで放置すると女性の体内でどのようなことが起こるかをコンピューターグラフィックを用いた映像で示し、症状がなくても放置すると危険であることを伝えた。さらに高校生では中絶とはどのような医療行為であるかを胎児の成長過程とともに示した（中学生では中絶率の上昇のグラフを提示するのみにとどめ、中絶ビデオ視聴希望者には個別に保健室で対応）。この際、ビデオの画像と音声だけでは重要な情報を聞き流す恐れがあるため、特に強調したい情報はビデオ上に文字として加え記憶にとどまりやすいように配慮した。これらのビデオを上記パワーポイントの途中で上映し、ビジュアル効果によりインパクトを高めた。

（但し、「中絶」、「クラミジア」ビデオの使用の仕方（両方使う、いずれか一方を使う、どちらも

使わない) は、各学校の生徒の発達段階、行動段階に合わせ、さらに文部科学省の指導要領を考慮して各学校で最終判断)

- ④ **課題提供型グループワーク**：友達同士の 5-6 人のグループにわかれ、受動的な講義形式でない全員参加型の授業（グループワーク形式）とした。提供する課題の例は、「交際して楽しいことはなんだろう？」（中学生）、「なぜ性関係を急ぐのか？」（高校生）といった交際に関することや「（中学生あるいは高校生として）性問題を予防するにはどうしたらいいか？」、「将来、大人になった時の夢は？」「メディアはどれくらい信じられるか」「メールと直接会うことの違い」など各校の生徒の発達段階や意識の実態にあわせた課題を提供し、top-down に教師が指導するのではなく、生徒たち同士で自分達の考えを討議し、自分の考えを友人の考えと比較議論することを通して、自分に適切と思われる予防のありかた（生き方）を考える場を提供した。教師（講師）からの意見は、生徒達の討議終了後に、1 人の大人からの意見として彼らの選択肢の一つに追加できる形式として授業の最後にメッセージとして付け加える程度とした。

【モデル授業以外の予防介入】

予防教育（介入）実施期間中、対象校にはポスター/パンフを貼付配布した。（図6）（図7）

ポスター/パンフ作成戦略:ポスター/パンフ作製の際には、下記の2点を考慮した。

- (1) メッセージを明確にする：漠然とした抽象的なメッセージを流すのではなく、具体的で明確なメッセージを流す。
- (2) リスク認知の向上を図る（自分のこととして捉える：risk personalization）
 - ① 身近な情報（地方の高校生にとって、エイズよりも、「望まない妊娠」・「クラミジア感染」などより身近なものからリスクを伝える方法を用いる。）
 - ② 地域性（locality）を強調し、自分達の地域の問題であることを印象付ける。（地域性を強調するため、各県の方言、各県の特産物などを配置し、各県ごとにポスター/パンフのデザインを変えた）
 - ③ 性的ネットワークの概念（性の問題は一部の人たちの問題ではなく、誰にでもリスクがあることを示す。）

ポスターのデザインの特徴:

- ① 地域の身近な情報:ポスターデザインは、普通の高校生をイメージした明るいもの（性的におとなしい生徒が見ても羞恥心を感じないもの）とした（次ページポスター写真参照）。地域性を出すために、各地域の方言でコメントをはさむ形とし、直接エイズ予防を伝えるものではなく、若者がより身近に感じる各県の中絶率の動向と具体的な数値、各県の性感染症感染率の動向を伝え、これらのリスクが他人事ではないこと、誰もが気をつけなければならないというメッセージを伝えた。
- ② 小回りのきくサイズ:ポスターの大きさはA3版とした。これは、通常のポスターのサイズ（A2版以上）では、貼付場所が限られたり、仮に貼ったとしても短期間ではがされてしまう可能性が高いためである。A3版は、貼りやすく、場所に余裕のある場合は数枚連続で貼れるなどflexibilityが高い。（貼付場所はトイレ個室内等を推奨）
- ③ プロンプト効果:ポスターとパンフの表紙は同じデザインとし、ポスターで各県の現状の一部ハイライト部分を紹介し、さらに詳しく知りたい人はパンフ（名刺サイズ）を見るように、ポスターメッセージとパンフとの連続性を持たせ、ポスターを目にすることで、パンフの内容が繰り返し想起される効果（プロンプト効果）を期待した。



図6. ポスター

パンフのデザイン内容の特徴:

- ① 携帯性：名刺サイズ
- ② 地域文化の反映：方言の使用、地域の疫学情報。
- ③ デザイン：性的なことやエイズを連想させない一般的なデザインとした。
- ④ 無駄のない内容：パンフの内容は調査結果（量的調査、質的調査）を踏まえ特に誤解の多かったもの、質問の多かったものを中心に構成されており、携帯に便利のように名刺サイズでパンフ全体のページ数は少数に抑え、さらに詳しい情報が欲しい人にはパンフの最終ページに電話相談の窓口や携帯電話でアクセス可能なインターネットサイトを提示した。①エイズはアフリカの話か？②エイズは血液でうつる病気か？③日本のエイズ・クラミジア・人工妊娠中絶の動向、④地元の10代のクラミジア感染率、10代の人工妊娠中絶率、⑤性交開始時期と性感染症（STD）へのかかりやすさとの関係、⑥STDの種類、⑦STDの流行状況、⑧STDの無症状性、⑨STDを放置した場合の合併症、⑩STDとHIVの相互作用、⑪ピルではSTD/HIV予防はできない、⑫若者のコンドーム使用状況、⑬特定の相手は大丈夫か？⑭特定パートナーからのSTD感染例、⑮性的ネットワーク、⑯予防するには？、⑰相談窓口とした。（但し、高校生用と中学生用は内容が異なる）

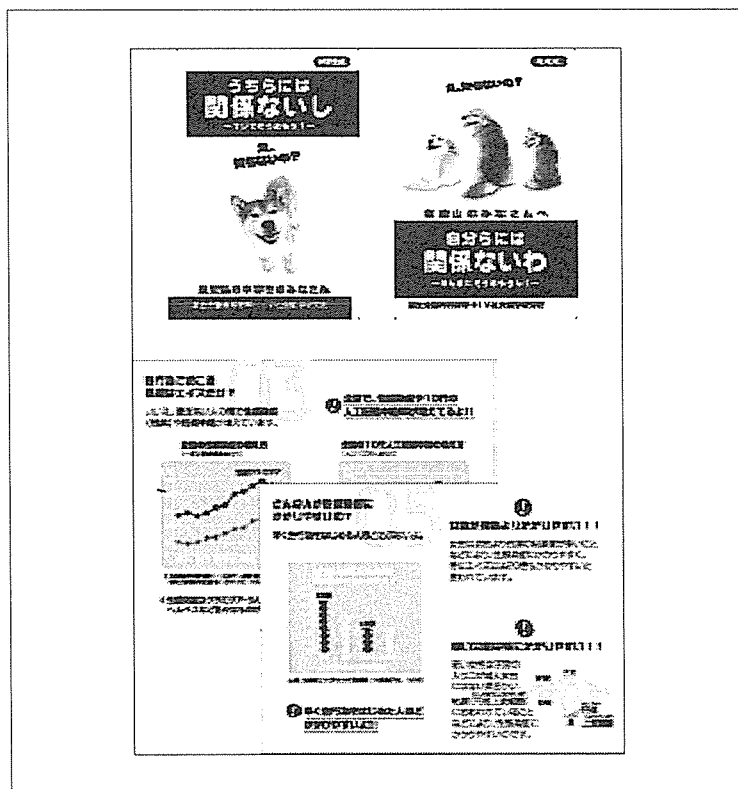


図 7. パンフレット

【 プロセス評価 】

本予防プログラム参加校には、予防介入実施の有無に関わらず、各県別にデザインされたポスター（学校規模にかかわらず各校 20 枚）/パンフ（生徒数分）が希望枚数、各校に配布された。ポスター/パンフの貼付配布方法および配布するかどうかは各学校の判断に任せた。

ポスター/パンフレット曝露状況（図 8）（図 9）

図 8、図 9 にプログラム参加校の中学 3 年生、高校 2 年生がポスターやパンフレットにどの程度曝露されたかを示す。ポスターへの曝露率は、中学 3 年生では男子 69.6%、女子 77.6%、高校 2 年生では男子 66.9%、女子 70.6%とポスター曝露率は、約 7 割前後で、パンフへの曝露率は中学 3 年生では男子 61.1%、女子 67.8%、高校 2 年生では男子 53.1%、女子 59.0%と約 6 割前後で、ポスター/パンフともに女子への曝露率の方が高率であった ($P<0.001$)。

図 8. 予防ポスター曝露状況（プロセス評価）

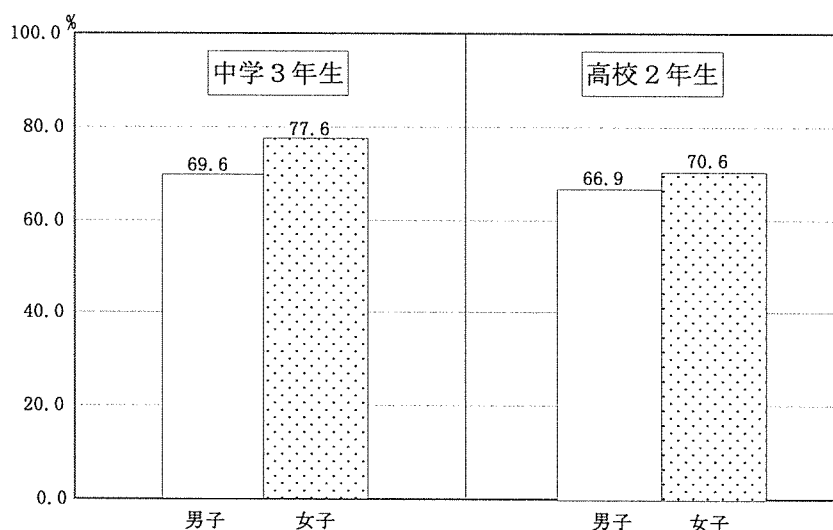
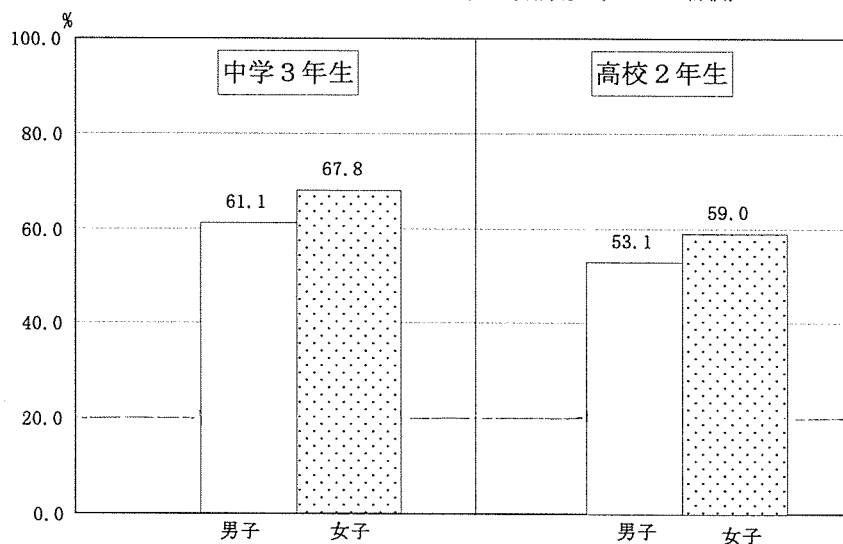


図 9. 予防パンフレット曝露状況（プロセス評価）



入手したパンフの波及効果（入手後の経過）（図10）（図11）（図12）（図13）

図10にパンフレットを取得した後、調査時まで継続して所持していた生徒の割合を示す（授業約1-2ヵ月後）。パンフレットを入手した生徒のうち、中学3年生/高校2年生とも男子の55%程度、女子では6割前後がパンフレットを捨てることなく、継続所持していることが示された。また中学生、高校生とも、男子に比べ女子の方が継続所持率が高率であった（男女差 $P<0.001$ ）。入手したパンフレットの使用状況では、「入手後1回以上パンフを読んだ」割合は、中学生/高校生とも7-8割が、入手するだけでなく、入手後パンフを1回以上読んでおり、これまで同様女子の方が高率であった（図11）。また、「自分で読むだけではなく、他の人にも見せた人」は、中学生、高校生とも約1-2割の人が、入手したパンフを自分以外の人にも見せていることが明らかとなった（図12）。見せた相手を図13に示す。中学生男子、高校生男女では、「友人」が最も多かったが（中学生男子64%、高校生男子77%、高校生女子53%）、中学生では「親」に見せている割合も高く、中学生女子6割、中学生男子でも3割を超えていた。高校生でも女子では4割近くは「親」にもパンフを見せていた（但し、高校生男子2割）（「親」については、男女差は $P<0.001$ ）。この結果より、もらったパンフレットは、本人だけでなくピアである友人や2nd オーディエンスにも2次的な波及効果があることが示唆された。

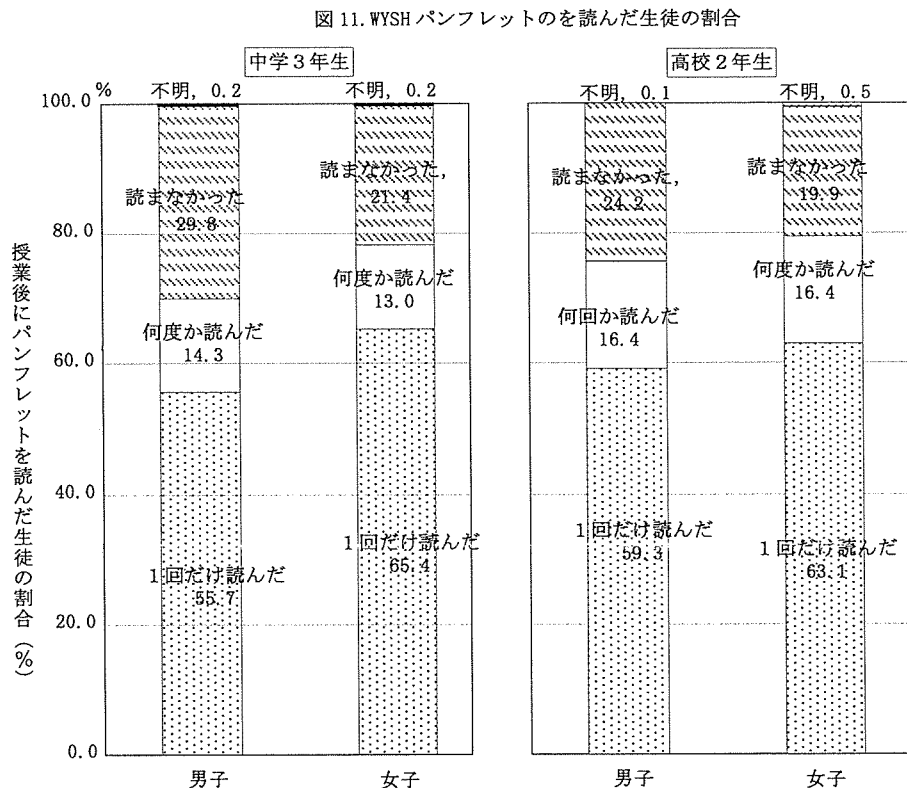
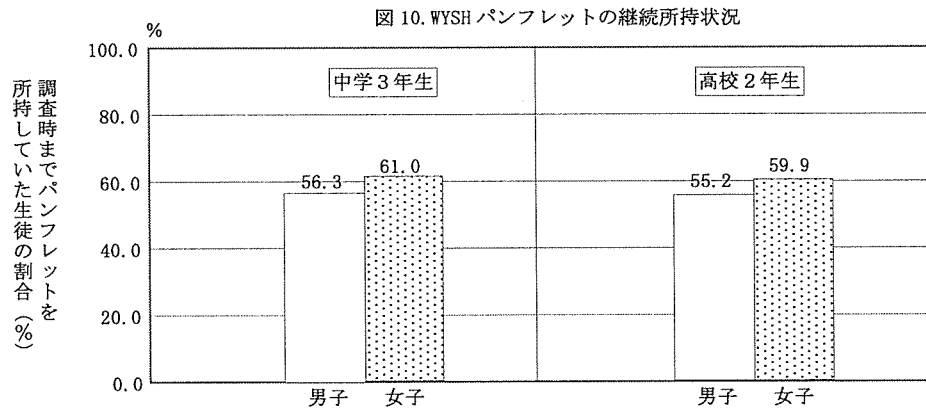


図 12.WYSH パンフレットの波及効果

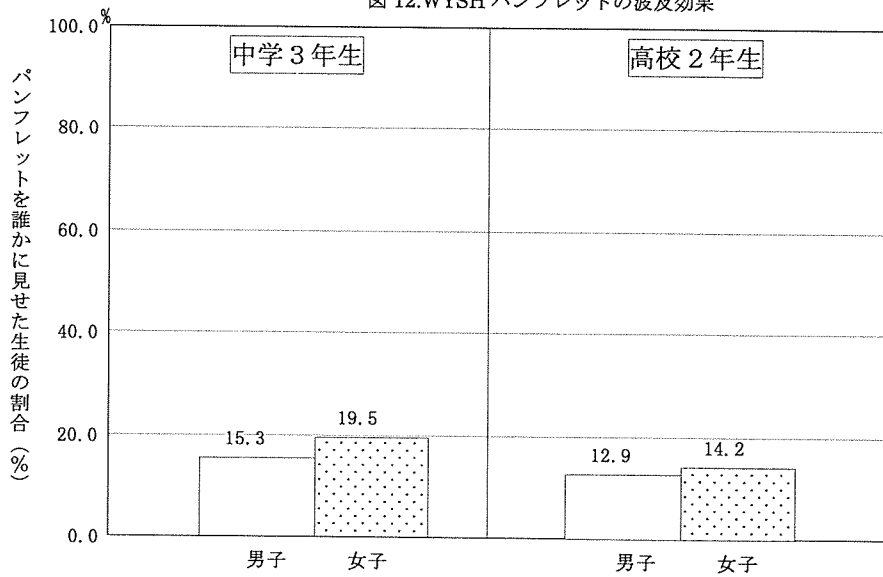
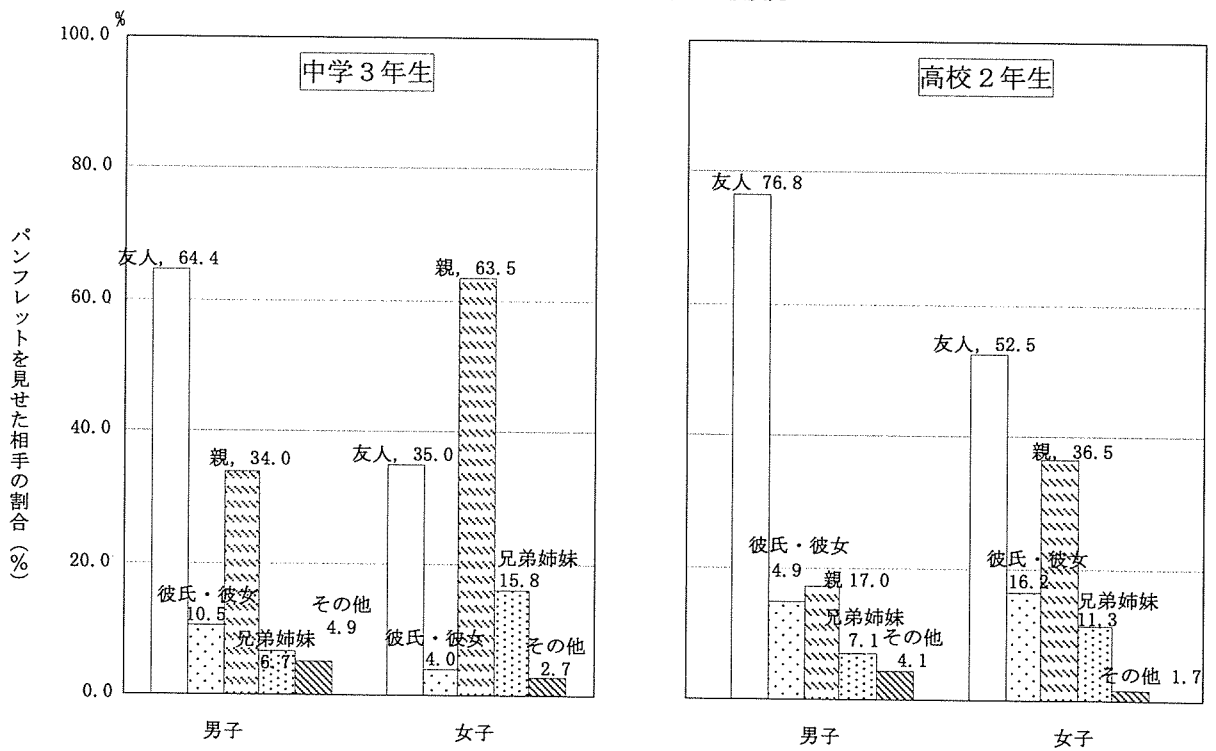


図 13. WYSH パンフレットの波及先



【ポスター/パンフレットの効果評価】

本予防プログラム参加校では、実施時間数や実施状況に差はあるものの、ほぼ全ての学校で WYSH 教育の授業が実施されていた。授業実施に加えて、ポスター/パンフを貼付・配布した際の、STD/HIV 関連知識の正解率に対する影響を調べた。STD/HIV 関連知識項目のうち若者のリスク認知に特に関わりの深い、「①クラミジアは性病、②HIV と STD の相互作用、③STD は無症状のことがある、④STD は不妊の原因になりうる、⑤STD は子宮癌の原因になりうる、⑥地元の中絶が増加している」の 6 項目を重点知識項目として抽出し、ポスター/パンフレット暴露の有無別の重点知識項目の正解率の違いを比較した。中学生/高校生とも、ポスター/パンフレット暴露群の方が、非暴露群に比べ 10%前後知識の正解率が高率であった ($P<0.001$) (中学生：表 1、表 2、表 3、表 4) (高校生：表 5、表 6、表 7、表 8)。但し、暴露群のほとんどはポスター/パンフレット両方に暴露され、2つの啓発資材の統合された影響を受けていることから、両資材の影響の差異に関しては今回は測定していない。

表 1. ポスターへの暴露有無別 STD/HIV 知識正解率 (中3男子)

質問項目	ポスターへの暴露		差
	なし	あり	
クラミジアは性病	n=1191	n=2761	
	72.9	82.4	9.5
HIV と STD 相互作用	59.4	72.0	12.6
STD は無症状のことがある	21.8	28.8	7.0
STD は不妊の原因になることがある	60.4	69.6	9.2
STD は子宮がんの原因になることがある	37.9	46.1	8.2
地元の若年層中絶率が増加	50.5	63.9	13.4
平均	50.5	60.5	10.0

表 2. ポスターへの暴露有無別 STD/HIV 知識正解率 (中3女子)

質問項目	ポスターへの暴露		差
	なし	あり	
クラミジアは性病	n=876	n=3059	
	74.4	86.3	11.9
HIV と STD 相互作用	66.1	76.0	9.9
STD は無症状のことがある	32.2	37.7	5.5
STD は不妊の原因になることがある	65.9	77.9	12.0
STD は子宮がんの原因になることがある	39.9	45.9	6.0
地元の若年層中絶率が増加	59.8	72.7	12.9
平均	56.4	66.1	9.7

表 3. パンフレットへの暴露有無別 STD/HIV 知識正解率 (中3男子)

質問項目	パンフレットへの暴露		差
	なし	あり	
クラミジアは性病	n=1527	n=2423	
	75.6	82.1	6.5
HIV と STD 相互作用	60.1	73.3	13.2
STD は無症状のことがある	21.9	29.6	7.7
STD は不妊の原因になることがある	60.7	70.7	10.0
STD は子宮がんの原因になることがある	38.4	47.0	8.6
地元の若年層中絶率が増加	52.2	64.7	12.5
平均	51.5	61.2	9.8

表 4. パンフレットへの暴露有無別 STD/HIV 知識正解率 (中3女子)

質問項目	パンフレットへの暴露		差
	なし	あり	
クラミジアは性病	n=1256	n=2672	
	77.5	86.5	9.0
HIV と STD 相互作用	66.5	77.2	10.7
STD は無症状のことがある	30.7	39.2	8.5
STD は不妊の原因になることがある	66.6	79.4	12.8
STD は子宮がんの原因になることがある	40.0	46.7	6.7
地元の若年層中絶率が増加	59.3	74.8	15.5
平均	56.8	67.3	10.5

表 5. ポスターへの暴露有無別 STD/HIV 知識正解率 (高2男子)

質問項目	ポスターへの暴露		差
	なし	あり	
クラミジアは性病	n=1162	n=2381	
	80.4	89.8	9.4
HIV と STD 相互作用	61.6	78.7	17.1
STD は無症状のことがある	31.1	43.9	12.8
STD は不妊の原因になることがある	58.1	74.6	16.5
STD は子宮がんの原因になることがある	41.2	56.2	15.0
地元の若年層中絶率が増加	56.2	69.3	13.1
平均	54.8	68.8	14.0

表 6. ポスターへの暴露有無別 STD/HIV 知識正解率 (高2女子)

質問項目	ポスターへの暴露		差
	なし	あり	
クラミジアは性病	n=1198	n=2919	
	81.6	88.8	7.2
HIV と STD 相互作用	63.5	79.4	15.9
STD は無症状のことがある	36.1	44.5	8.4
STD は不妊の原因になることがある	65.0	75.6	10.6
STD は子宮がんの原因になることがある	37.0	47.9	10.9
地元の若年層中絶率が増加	63.6	71.4	7.8
平均	57.8	67.9	10.1

表 7. パンフレットへの暴露有無別 STD/HIV 知識正解率 (高2男子)

質問項目	パンフレットへの暴露		差
	なし	あり	
クラミジアは性病	n=1648	n=1889	
	82.5	90.5	8.0
HIV と STD 相互作用	66.4	79.1	12.7
STD は無症状のことがある	33.0	45.6	12.6
STD は不妊の原因になることがある	63.9	73.8	9.9
STD は子宮がんの原因になることがある	47.8	54.4	6.6
地元の若年層中絶率が増加	58.6	70.7	12.1
平均	58.7	69.0	10.3

表 8. パンフレットへの暴露有無別 STD/HIV 知識正解率 (高2女子)

質問項目	パンフレットへの暴露		差
	なし	あり	
クラミジアは性病	n=1679	n=2436	
	82.3	89.6	7.3
HIV と STD 相互作用	67.1	80.0	12.9
STD は無症状のことがある	36.0	46.1	10.1
STD は不妊の原因になることがある	67.8	75.7	7.9
STD は子宮がんの原因になることがある	42.3	46.4	4.1
地元の若年層中絶率が増加	61.5	74.2	12.7
平均	59.5	68.7	9.2

【 介入の評価方法 】

図 4 に示したように、予防介入（教育）前後に質問紙調査（事前調査、事後調査）を行い、知識、意識、行動に対する介入の効果を評価した。

(1) 評価に用いた質問紙と調査項目

- (1) 事前調査質問紙（中学生）：自記式で 8 ページ、回答所要時間は約 12～13 分間、主質問 26 問、付問含めて 64 問で。質問紙の構成は、①属性、②学校生活、③自分自身について、④日常生活（各種経験）、⑤エイズ/性感染症関連知識、⑥交友関係、⑦性行動、⑧性意識、⑨予防に関する基本知識、⑩エイズ/性感染症リスク認知、⑪性教育・性情報に対する要望など（中学生用 1 回目：資料 12）。
- (2) 事後調査質問紙（中学生）：自記式で 8 ページ、回答所要時間は約 12～13 分間、主質問 23 問、付問含めて 54 問。質問項目の構成は、①属性、②自分自身について（学校生活も含む）、③エイズ/性感染症関連知識、④交友関係、⑤性行動、⑥性意識、⑦予防に関する基本知識、⑧エイズ/性感染症リスク認知など。事前調査の質問紙との違いは、事後調査の質問紙では、事前調査に含まれていた日常生活に関する質問、性教育に関する質問群が削除され、かわりに予防啓発への暴露状況等を問う質問群が追加されたことである。（中学生用 2 回目：資料 13）
- (3) 事前調査質問紙（高校生）：自記式で 8 ページ、回答所要時間は約 12～13 分間、主質問 23 問、付問含めて 66 問で。質問紙の構成は、①属性、②高校生活、③自分自身について、④日常生活（各種経験）、⑤エイズ/性感染症関連知識、⑥交友関係、⑦性行動、⑧性意識、⑨エイズ/性感染症リスク認知、⑩性教育・性情報に対する要望など（高校生用 1 回目：資料 14）。
- (4) 事後調査質問紙（高校生）：自記式で 8 ページ、回答所要時間は約 12～13 分間、主質問 20 問、付問含めて 56 問。質問項目の構成は、①属性、②自分自身について（学校生活を含む）、③エイズ/性感染症関連知識、④交友関係、⑤性行動、⑥性意識、⑦エイズ/性感染症リスク認知など。事前調査の質問紙との違いは、事後調査の質問紙では、事前調査に含まれていた日常生活に関する質問、性教育に関する質問群が削除され、かわりに予防啓発への暴露状況等を問う質問群が追加されたことである。（高校生用 2 回目：資料 15）

(2) 評価デザイン

参加校の予防教育担当者に対してアンケート調査（「性教育/エイズ教育実施状況に関するアンケート」、資料 5）を行い、事前調査と事後調査の間に各校で実施された予防教育の内容を調べた。質問数 16 問、調査項目は、①2 学期中に WYSH 教育実施の有無、②授業実施形態（全クラス同じか、クラスにより異なるのか）、③WYSH 式授業の個別要素（パワーポイント、ビデオ、グループワーク実施の有無および内容、ゲーム、教師からのメッセージ）の取り入れの有無、④実施形態（男女別、コマ数）、⑤授業実施者、⑥WYSH 式を実施して良かった点と困った点（自由記載）、⑦WYSH 式以外のエイズ教育実施の有無とその内容、⑧一般的に性の予防教育を実施する上で問題となっている点（自由記載）とした。調査データに基づいて、学校を教育内容によってサブグループに分類し、それらのグループ間で介入効果を比較した。評価は中学 3 年生と高校 2 年生について集計した。

◆ 中学 3 年生

プログラムに参加した全中学校 88 校のうち、4 校は事後調査に参加しなかったため、84 中学校に対し、上述の「性教育/エイズ教育実施状況に関するアンケート」を実施して介入内容の確認を行なった。それに基づいて、下記のように 4 つの学校群（G0～G3）に分類した（表 9）。各群は以下のように定義した；

G0*群（22 校、非介入群）：2004 年 9 月～12 月の期間中に、中学 3 年生に対し、モデル教育を全く実施しなかった学校。（*今年度は非介入校が 1 校しかなかったため、2004 年度の非介入群を比較群として使用）

G1 群（24 校、フルモデル群）：研修会で説明した WYSH 式モデル教育のすべての要素（パワーポイント、ビデオ使用およびクイズ/グループワーク等導入）を実施した学校。

G2 群（49 校、一部欠如群）：モデル授業の主要要素以外の一部が欠如した学校。

G3群（11校、不完全群）：モデル授業の要素中一部のみを取り入れた学校。

教育効果は、この期間、介入の行なわれなかったG0*群を比較のベースとして評価した。

表 9. 中学校群別予防介入内容の内訳

介入内容	学校数	生徒数(事前)	生徒数(事後)	パワポ授業	ビデオ	ゲーム等
G0非介入群	22	2569	2543	×	×	×
G1フルモデル群	24	2207	2162	○	○	○
G2「一部欠如」群	49	4375	4295	○	○	△
G3「不完全」群	11	—	—	△	△	△

◆ 高校2年生

プログラムに参加した全高等学校 52 校に対し、上述の「性教育/エイズ教育実施状況に関するアンケート」を実施して介入内容の確認を行なった。（*但し、今年度の参加県の中で、ある1つの県で県下全域に県教育委員会から別の性教育教材が配布実施された参加校 21 校は、他教材がWYSH教育の効果評価の際の交絡因子となる可能性があるため、集計からは除外した。）残り 30 校（参加校のうち1校は事後調査不参加）に対し、下記のように4つの学校群（G0～G3）に分類した（表 10）。各群は中学校と同様以下のように定義した；

G0*群（7校、非介入群）：2004年9月～12月の期間中に高校2年生に対し、モデル教育を全く実施しなかった学校。（*今年度は非介入校がなかったため、2004度の非介入群を比較群として使用；但しコンドーム使用状況に関しては設問が異なるため今年度の不完全群を代用）

G1群（10校、フルモデル群）：研修会で説明したWYSH式モデル教育のすべての要素（パワーポイント、ビデオ使用およびクイズ/グループワーク等導入）を実施した学校。

G2群（13校、「一部欠如」群）：モデル授業の主要要素以外の一部が欠如した学校。

G3群（3校、「不完全」群）：モデル授業の要素中わずか一部のみを取り入れた学校。

教育効果は、この期間、介入の行なわれなかったG0*群を比較のベースとして評価した。

（但し、高校1年生/3年生に授業を実施した4校は、今回の集計からは除外した。）

表 10. 高等学校群別予防介入内容の内訳

介入内容	学校数	生徒数(事前)	生徒数(事後)	パワポ授業	ビデオ	ゲーム等
G0非介入群	7	1014	984	×	×	×
G1フルモデル群	13	2563	2434	○	○	○
G2「一部欠如」群	10	2002	1953	○	○	△
G3「不完全」群	3	431	418	△	△	△

【 介入の効果評価 】

(1) HIV/STD 関連知識の変化

◆中学校 3 年生（表 11）（表 12）（表 13）

本予防プログラムに参加した中学 3 年生におけるエイズ/性感染症に関する知識項目の正解率を介入の前後で比較した。

知識項目のうち、若者のリスク認知に特に関わりが深い、「①クラミジアは性病、②HIV と STD の相互作用、③STD は無症状のことがある、④STD は不妊の原因になりうる、⑤STD は子宮癌の原因になりうる、⑥地元の中絶が増加している」の 6 項目を重点知識項目として抽出し、介入前後の重点知識項目の変化を比較した。それによると、非介入群 G0*における正解率平均値の上昇は、男女とも約 10%（男子 9.8%、女子 9.7%）にとどまったが（表 11）、G1（フルモデル）群（男子 46.2%、女子 48.1%）では 50%近く（表 12）、G2（一部欠如）群（男子 41.7%、女子 42.2%）でも 40%を超え（表 13）、モデル授業実施学校群では 40-50%近くと昨年よりも正解率さらに 10%増加し、知識が大幅に増加した。但し、重点知識項目の中ですべての項目が、同じように上昇しているのではなく、「STD は無症状のことがある」「STD は子宮がんの原因になる」は他の項目に比べて介入の効果小さく、特に「STD は無症状のことがある」の正解率は介入後も 3-4 割前後にとどまっていた。昨年度も同様の傾向が観察されたため、今年度はこれらの項目に関してはビデオを見せるだけでなく教師からの口頭での説明も加えて指導を強化したが、知識の大幅上昇は見られず、知識がエスケープしている可能性があることから、この 2 項目に関しては、他の項目とは別のアプローチの必要性が示唆された。

男女で、G0*群（非介入群：2004 年度）の値を、G1 群、G2 群（介入群）の値の分布と *t* 検定で比較すると、重点 6 項目すべてにおいて統計学的に有意であった（男女とも： $P < 0.001$ ）。

表 11. HIV/STD 関連知識（重点 6 項目）の変化（非介入：G0*群）

質問項目	単位 (%)					
	男子			女子		
	事前	事後	差	事前	事後	差
	n=1358	n=1350		n=1211	n=1193	
1 クラミジアは性病	26.1	40.5	14.4	32.6	43.9	11.3
2 HIV と STD 相互作用	20.5	31.4	10.9	21.1	34.5	13.4
3 STD は無症状のことがある	19.4	25.5	6.1	20.4	27.7	7.3
4 STD は不妊の原因になりうる	28.6	39.0	10.4	36.2	46.3	10.1
5 STD は子宮癌の原因になりうる	21.1	29.0	7.9	22.8	26.9	4.1
6 地域中絶増加	21.1	30.0	8.9	25.2	37.3	12.1
平均	22.8	32.6	9.8	26.4	36.1	9.7

表 12. HIV/STD 関連知識（重点 6 項目）の変化（G1）

質問項目	単位 (%)					
	男子			女子		
	事前	事後	差	事前	事後	差
	n=1073	n=1048		n=1134	n=1114	
1 クラミジアは性病	14.5	84.0	69.5	16.6	87.4	70.8
2 HIV と STD 相互作用	19.5	74.6	55.1	26.7	77.7	51.0
3 STD は無症状のことがある	9.1	31.6	22.5	9.4	41.7	32.3
4 STD は不妊の原因になりうる	16.8	67.7	50.9	23.8	79.4	55.6
5 STD は子宮癌の原因になりうる	14.0	45.9	31.9	17.6	44.9	27.3
6 地域中絶増加	17.0	64.2	47.2	24.6	76.0	51.4
平均	15.2	61.3	46.2	19.8	67.9	48.1

表 13. HIV/STD 関連知識（重点 6 項目）の変化（G2）

質問項目	単位 (%)					
	男子			女子		
	事前	事後	差	事前	事後	差
	n=2227	n=2174		n=2148	n=2121	
1 クラミジアは性病	17.4	79.8	62.4	22.7	85.8	63.1
2 HIV と STD 相互作用	19.7	69.5	49.8	26.4	76.4	50.0
3 STD は無症状のことがある	8.5	25.8	17.3	9.6	37.5	27.9
4 STD は不妊の原因になりうる	20.7	70.6	49.9	32.0	78.4	46.4
5 STD は子宮癌の原因になりうる	15.8	45.1	29.3	22.5	46.3	23.8
6 地域中絶増加	18.3	59.7	41.4	28.0	70.1	42.1
平均	16.7	58.4	41.7	23.5	65.8	42.2

◆高校2年生（表14）（表15）（表16）

本予防プログラムに参加した高校2年生におけるエイズ/性感染症に関する知識項目の正解率を介入の前後で比較した。

知識項目のうち若者のリスク認知に特に関わりの深い、「①クラミジアは性病、②HIVとSTDの相互作用、③STDは無症状のことがある、④STDは不妊の原因になりうる、⑤STDは子宮癌の原因になりうる、⑥地元の中絶が増加している」の6項目を重点知識項目として抽出し、介入前後の重点知識項目の変化を比較した。それによると、非介入群G0*における正解率平均値の上昇は、男女とも約10%（男子10.2%、女子7.2%）にとどまったが（表14）、G1（フルモデル）群（男子29.1%、女子31.4%）で30%前後の増加（表15）、G2（一部欠如）群（男子33.8%、女子30.2%）も同じく30%を超える増加で（表16）、モデル授業実施学校群では30%近く大幅に増加した。介入群の中でG1フルモデル群では、事前調査の結果でももともと知識レベルがG2群よりも男女とも統計的に有意に高かったが、G2群と同程度の知識の増加が観察され、特に女子では介入後の知識の正解率平均値は70%に達していた。さらに、重点知識項目の中ですべての項目が、同じように上昇しているのではなく、「STDは無症状の場合がある」「STDは子宮がんの原因になる」は他の項目に比べて介入の効果が小さく、介入後の正解率も両項目共に5割前後にとどまっていた。中学生と同じく、昨年度も同様の傾向が観察されたため、今年度はこれらの項目に関してはビデオを見せるだけでなく教師からの口頭での説明も加えて指導を強化したが、知識の大幅上昇は見られず、知識がエスケープしている可能性があることから、この2項目に関しては、他の項目とは別のアプローチの必要性が示唆された。

男女で、G0*群（非介入群：2004年度）の値を、G1群、G2群（介入群）の値の分布とt検定で比較すると、重点6項目全体では統計学的に有意であった（男子 $P<0.001$ 、女子 $P<0.001$ ）。

表14. HIV/STD関連知識（重点6項目）の変化（非介入：G0*群） 単位（%）

質問項目	男子			女子		
	事前	事後	差	事前	事後	差
	n=391	n=380		n=623	n=604	
1 クラミジアは性病	56.5	63.7	7.2	65.3	70.0	4.7
2 HIVとSTD相互作用	34.5	49.2	14.7	43.7	52.6	8.9
3 STDは無症状のことがある	45.3	51.6	6.3	56.5	60.1	3.6
4 STDは不妊の原因になりうる	45.8	55.8	10.0	57.9	62.4	4.5
5 STDは子宮癌の原因になりうる	35.3	44.5	9.2	33.1	42.7	9.6
6 地域中絶増加	40.2	53.9	13.7	48.0	60.1	12.1
平均	42.9	53.1	10.2	50.8	58.0	7.2

表15. HIV/STD関連知識（重点6項目）の変化（G1） 単位（%）

質問項目	男子			女子		
	事前	事後	差	事前	事後	差
	n=1276	n=1215		n=1287	n=1219	
1 クラミジアは性病	68.6	87.2	18.6	66.2	89.7	23.5
2 HIVとSTD相互作用	35.1	77.7	42.6	37.3	84.0	46.7
3 STDは無症状のことがある	23.7	45.6	21.9	23.3	47.8	24.5
4 STDは不妊の原因になりうる	38.7	73.7	35.0	45.8	80.6	34.8
5 STDは子宮癌の原因になりうる	26.8	51.9	25.1	24.8	48.3	23.5
6 地域中絶増加	31.7	62.9	31.2	34.9	70.5	35.6
平均	37.4	66.5	29.1	38.7	70.2	31.4

表16. HIV/STD関連知識（重点6項目）の変化（G2） 単位（%）

質問項目	男子			女子		
	事前	事後	差	事前	事後	差
	n=801	n=792		n=1201	n=1161	
1 クラミジアは性病	68.2	88.5	20.3	63.9	83.9	20.0
2 HIVとSTD相互作用	30.1	77.4	47.3	32.9	72.6	39.7
3 STDは無症状のことがある	22.3	44.4	22.1	18.7	40.4	21.7
4 STDは不妊の原因になりうる	39.1	72.9	33.8	42.2	72.2	30.0
5 STDは子宮癌の原因になりうる	26.6	60.5	33.9	20.1	50.1	30.0
6 地域中絶増加	21.5	67.0	45.5	23.8	63.3	39.5
平均	34.6	68.5	33.8	33.6	63.8	30.2

(2) 性意識の変化

◆中学3年生

■性関係に対する態度の変化

1. 中学生が性関係を持つことに対する考え方(表 17)

全ての中学3年生に、「中学生が性関係を持つことをどう思いますか」と尋ねた(注:但し G0*群〔2004年度〕は「友達が」という表現を用いているので質問のワーディングが異なる)。「かまわないと思う」、「どちらかと言えばかまわないと思う」、「どちらかと言えばよくないと思う」、「よくないと思う」「わからない」の5段階で中学生の性関係の容認/否認の程度を調べた(表 17)(注:性経験の意味を知っている知らないにかかわらず、算出の分母は全中学生とした)。

次に、介入による生徒の性意識の変化を、容認的变化と否認的变化をそれぞれ別々にスコアを用いて評価した(容認スコア、否認スコア)。容認スコアは、「かまわない」を100点、「どちらかと言えばかまわない」を50点とし、「どちらかと言えばよくない」「よくない」「わからない」「性関係の意味を知らない」に0点を与えて算出した。否認スコアは、逆に、「よくない」を100点、「どちらかと言えばよくない」を50点とし、「かまわない」「どちらかと言えばかまわない」「わからない」「性関係の意味を知らない」に0点を与えて算出した。

表 17 の右端に中学生の性関係に対する意識スコアを示した。それによると、非介入群男子で容認スコアが2点上昇し、否認スコアが3点減少していた。非介入群女子では、容認スコアには変化がなく、否認スコアは2点減少しており、非介入群では男女とも、わずかな性意識の活発化の傾向が示された。それに対し、介入群での変化は、フルモデル群(G1)では、「容認スコア」は男女とも13点減少し、「否認スコア」は男子17点、女子19点の顕著な増加が観察された。一部教育欠如群(G2)でも、「容認スコア」は男子13点、女子11点減少し、「否認スコア」は男子17点、女子19点のG1群と同じ大幅増加であった。以上を、まとめると、本プロジェクトのWYSH教育により中学生が性関係を持つことに対する意識が抑制されていることが示された。中学生に対する教育効果の特徴としては、男女差がなく、「容認スコア」と「否認スコア」とともに顕著な効果が確認されたが、「中学生では性関係をもつのはよくない」とする否認意識の方がより大きな効果が観察された。

男女で、G0*群(非介入群:2004年度)の「容認スコア」「否認スコア」の値を、G1群、G2群(介入群)の値の分布とt検定で比較すると、「容認スコア」「否認スコア」両方で男女とも統計学的に有意であった(男女とも: $P<0.001$)。

表 17. 中学生の性関係容認意識 (スコア)

		人数	かまわ ない	どちらかとい えばかまわ ない	どちらかとい えばよくない	よくない	わか らな い	容認 スコ ア	否認 スコ ア	
G0* 非介入	男子 n=708	事前	1358	35.2	15.8	14.2	12.3	9.1	43.1	19.4
		事後	1350	37.0	16.2	12.3	10.8	8.0	45.1	17.0
		差		1.8	0.4	-1.9	-1.5	-1.1	2.0	-2.5
	女子 n=894	事前	1211	28.6	16.6	22.5	14.2	8.3	36.9	25.5
		事後	1193	28.2	17.0	21.6	12.9	7.6	36.7	23.7
		差		-0.4	0.4	-0.9	-1.3	-0.7	-0.2	-1.8
G1 フル モデル	男子 n=708	事前	708	28.5	15.3	21.3	19.2	12.7	36.2	29.9
		事後	861	15.6	14.6	23.1	35.3	9.9	22.9	46.9
		差		-12.9	-0.7	1.8	16.1	-2.8	-13.3	17.0
	女子 n=894	事前	894	19.4	18.7	27.2	24.2	9.7	28.8	37.8
		事後	1024	9.6	12.8	26.1	43.5	7.2	16.0	56.6
		差		-9.8	-5.9	-1.1	19.3	-2.5	-12.8	18.8
G2 一部欠如	男子 n=1496	事前	1496	26.9	18.7	20.9	20.0	11.4	36.3	30.5
		事後	1804	17.2	13.2	21.6	36.5	10.4	23.8	47.3
		差		-9.7	-5.5	0.7	16.5	-1.0	-12.5	16.9
	女子 n=1741	事前	1741	16.9	17.3	30.0	26.8	7.8	25.6	41.8
		事後	1957	9.0	10.9	25.7	47.8	5.4	14.5	60.7
		差		-7.9	-6.4	-4.3	21.0	-2.4	-11.1	18.9

2. 高校生になってから性関係を持つことに対する考え方(表 18)

中学3年生に、「高校生になったとき、性関係をもつことをどう思うか」を尋ねた。中学生での性関係同様、「かまわないと思う」、「どちらかと言えばかまわないと思う」、「どちらかと言えばよくないと思う」、「よくないと思う」「わからない」の5段階で中学3年生が高校生になってからの性関係の容認/否認の程度を調べた(表18)(注1:性経験の意味を知っている知らないに関わらず、算出の分母は全中学生とした)(注2:2004年度の調査では、高校生になってからの友達の性関係について質問で内容が異なるため、本項目のG0*群は参考的な比較群として使用した)。

次に、介入による生徒の性意識の変化を、容認的变化と否認的变化をそれぞれ別々にスコアを用いて評価した(容認スコア、否認スコア)。容認スコアは、「かまわない」を100点、「どちらかと言えばかまわない」を50点とし、「どちらかと言えばよくない」「よくない」「わからない」「性関係の意味を知らない」に0点を与えて算出した。否認スコアは、逆に、「よくない」を100点、「どちらかと言えばよくない」を50点とし、「かまわない」「どちらかと言えばかまわない」「わからない」「性関係の意味を知らない」に0点を与えて算出した。

表18に高校生になってからの性関係に対する意識スコアを示した。それによると、G0*の非介入群(参考比較群)では、非介入群男子で容認スコアが3点減少し、否認スコアには変化がなく、非介入群女子では、容認スコアは4点減少し、否認スコアは男子同様変化が見られなかった。非介入群では男女とも、わずかな容認意識抑制の傾向が示された。それに対し、フルモデル群(G1)では、「容認スコア」は男子18点減少、女子21点減少の顕著な減少、「否認スコア」は男子13点、女子17点の大幅増加が観察された。一部教材欠如群(G2)では、「容認スコア」は男子18点、女子19点とG1群同様に顕著に減少し、「否認スコア」は男子15点、女子17点で大幅増加であった。以上を、まとめると、本プロジェクトの予防教育により高校生になってから性関係を持つことに対する容認意識も抑制されていることが示された。中学生に対する教育効果の特徴としては、「容認スコア」と「否認スコア」の変化の比較から、「高校生になってから性関係をもつのはかまわない」とする容認意識の減少に顕著な効果が観察された。本調査結果より、WYSH教育実施によって、中学3年生では、「中学生が性関係を持つこと」「高校生になってから性関係を持つこと」のどちらも顕著な意識の変容が確認された。

表 18. 高校生になってからの性関係容認意識 (スコア)

		人数	かまわ ない	どちらかとい えばかまわ ない	どちらかとい えばよく ない	よくない	わか らな い	容認 スコア	否認 スコア	
G0* 非介入	男子 n=1496	事前	1182	58.5	18.6	7.6	4.6	9.8	67.8	8.4
		事後	1178	55.5	18.8	8.0	4.0	10.4	64.9	8.0
		差		-3.0	0.2	0.4	-0.6	0.6	-2.9	-0.4
	女子 n=1741	事前	1095	55.5	23.4	9.3	3.6	7.9	67.2	8.3
		事後	1089	52.2	22.7	10.3	3.3	8.4	63.6	8.5
		差		-3.3	-0.7	1.0	-0.3	0.5	-3.7	0.2
G1 フル モデル	男子 n=861	事前	708	43.2	21.6	11.7	8.3	12.1	54.0	14.2
		事後	861	24.6	23.7	21.7	16.1	11.8	36.5	27.0
		差		-18.6	2.1	10.0	7.8	-0.3	-17.6	12.8
	女子 n=1024	事前	894	37.7	28.1	14.9	6.7	11.4	51.8	14.2
		事後	1024	17.8	26.4	25.8	17.7	11.0	31.0	30.6
		差		-19.9	-1.7	10.9	11.0	-0.4	-20.8	16.5
G2 一部欠如	男子 n=1496	事前	1496	42.5	22.2	15.4	6.6	11.4	53.6	14.3
		事後	1804	24.9	21.0	22.2	17.9	12.0	35.4	29.0
		差		-17.6	-1.2	6.8	11.3	0.6	-18.2	14.7
	女子 n=1741	事前	1741	33.7	29.6	16.4	8.7	10.5	48.5	16.9
		事後	1957	17.9	22.6	28.9	19.5	9.4	29.2	34.0
		差		-15.8	-7.0	12.5	10.8	-1.1	-19.3	17.1

◆高校2年生

■性関係に対する態度の変化

1. 高校生が性関係を持つことに対する考え方(一般論)(表 19)

高校2年生に、「一般に高校2年生が性関係を持つことをどう思いますか」と尋ねた(注:但しG0*群〔2004年度〕は「高校2年生がセックスすることをどう思いますか」という表現を用いた)。「かまわないと思う」、「どちらかと言えばかまわないと思う」、「どちらかと言えばよくないと思う」、「よくないと思う」「わからない」の5段階で高校生の性関係の容認/否認の程度を調べた(表 19)

次に、介入による生徒の性意識の変化を、容認的变化と否認的变化をそれぞれ別々にスコアを用いて評価した(容認スコア、否認スコア)。容認スコアは、「かまわない」を100点、「どちらかと言えばかまわない」を50点とし、「どちらかと言えばよくない」「よくない」「わからない」「性関係の意味を知らない」に0点を与えて算出した。否認スコアは、逆に、「よくない」を100点、「どちらかと言えばよくない」を50点とし、「かまわない」「どちらかと言えばかまわない」「わからない」「性関係の意味を知らない」に0点を与えて算出した。

表 19 右端に高校2年生の性関係に対する高校生の性意識スコアを示した。それによると、非介入群男子で容認スコアには変化がなく、否認スコアが1点減少していた。非介入群女子では、容認スコアは2点上昇し、否認スコアは2点減少しており、非介入群では男女とも、わずかながら性意識の活発化の傾向が示された。それに対し、介入群での変化は、フルモデル群(G1)では、「容認スコア」は男女ともに5点減少し、「否認スコア」は男子には2点、女子4点の増加が観察された。教材一部欠如群(G2)では、「容認スコア」は男子には変化がなく、女子は1点とわずかに上昇し、「否認スコア」は男子は変化なく、女子で1点の増加で全体として意識の変容は確認されなかった。以上を、まとめると、本プロジェクトのWYSH 予防教育により高校生が性関係を持つことに対する高校生の容認意識も抑制されていることが示された。高校生に対する教育効果の特徴としては、中学生同様効果に男女差はなかったが、中学生ほど意識変容の教育効果は顕著ではなかった。

表 19. 高校生の性関係容認意識(スコア)一般に高校2年生が性関係を持つことをどう思うか

		人数	かまわ ない	どちらかとい えばかまわ ない	どちらかとい えばいやだ	いやだ	わか ら ない	容認 スコア	否認 スコア	
G0* 非介入	男子	事前	391	53.5	18.2	10.2	7.7	10.0	62.6	12.8
		事後	380	54.2	16.6	9.5	6.8	11.8	62.5	11.6
		差		0.7	-1.6	-0.7	-0.9	1.8	-0.1	-1.3
	女子	事前	623	48.2	20.2	15.6	5.0	10.0	58.3	12.8
		事後	604	49.7	21.5	13.4	4.1	10.3	60.5	10.8
		差		1.5	1.3	-2.2	-0.9	0.3	2.2	-2.0
G1 フル モデル	男子	事前	1276	51.8	21.3	9.7	5.3	9.9	62.5	10.2
		事後	1215	46.3	21.9	10.9	6.8	10.5	57.3	12.3
		差		-5.5	0.6	1.2	1.5	0.6	-5.2	2.1
	女子	事前	1287	44.9	21.3	11.0	6.4	11.5	55.6	11.9
		事後	1219	39.0	23.8	16.8	7.5	8.8	50.9	15.9
		差		-5.9	2.5	5.8	1.1	-2.7	-4.7	4.0
G2 一部欠如	男子	事前	801	47.7	20.7	12.1	7.7	8.7	58.1	13.8
		事後	792	48.2	20.5	11.7	8.1	9.2	58.5	14.0
		差		0.5	-0.2	-0.4	0.4	0.5	0.4	0.2
	女子	事前	1201	42.0	23.0	12.3	6.6	10.4	53.5	12.8
		事後	1161	42.8	22.7	14.4	6.9	8.1	54.2	14.1
		差		0.8	-0.3	2.1	0.3	-2.3	0.6	1.4